

架蔵『源氏小かゞみ』（いわゆる『源氏系図小鑑』）―翻刻と解題―

妹尾好信

〔キーワード〕 源氏系図小鑑、源氏物語享受資料、源氏抄、源氏之作意

〔凡例〕

- 一 架蔵の写本『源氏小かゞみ』の全文を翻刻し、簡略な解題を付した。同書はいわゆる『源氏系図小鑑』の一伝本である。
- 一 翻刻にあたっては、次のような処理を施した。
 - 1 変体仮名はすべて現行の字体に改めた。漢字については、できるだけ原本の字体を尊重したが、特殊な異体字は通行の字体に改めた。
 - 2 原文には句読点がないが、読みやすさを考慮して適宜句読点と引用符を施した。特に読点は、原文の韻律を考慮して施した。仮名の清濁については、原文のままとした。
 - 3 ところどころにある朱筆の傍書は、「」に入れて記した。
 - 4 全体を大きく二部に分け、**【第一部 『源氏物語』の作意】**・**【第二部 『源氏物語』の人々】**との見出しを掲げた。第二部はさらに九つに区分して、小見出しを掲げた。内容のまとまりに応じて適宜形式段落を設けた。
 - 5 一面の終わりに（1オ）（1ウ）のように丁数と表・裏の別を記した。「オ」は表を、「ウ」は裏を表す。
 - 4 本文の誤脱が認められる箇所には、（ ）内にその旨を傍記した。また適宜（ ）内に本文に関する注を記した。
 - 5 底本には虫損のため判読不能な文字が存する。その場合は□で表記し、右傍に括弧して想定される文字を記した。
 - 6 **【第一部 『源氏物語』の作意】**については、蓬左文庫蔵『源氏之作意』との異同を（ ）内に傍記した。

〔翻 刻〕

源氏こかゝみ（外題）

【第一部 『源氏物語』の作意】

今はむかし、越前の守ためときとて、さいかくゆふにやさしきは、むらさき式部かち、なれや。その人けんしをつくり出（出）、こまかなる事はかり、むすめにかゝせたるなど、かの宇治大なこんの物かたりにみへたるは、女のかくへきことならずと、ほんぶのあさきうたかひなり。そのむらさきの日記にも、「けふは（1オ）式部さといひて、しきといふふみよむ」とあり。ないてんげてんくらからず、天だい一しんさんくわんのけちみやくにも人となり。しゆんとく院の御時（日記）に、光源氏の物語、むらさきしきふかきたるを、一てうの院御らんして、「こはふかしきのことぞかし。日本記をよくしりたり」と、りんげんあるをねたみてや、（1ウ）さへもんのないしのすけ、すなはちしきふを日本きのつほねとなつけいひしなり。此人初はたかつかさ殿まさのふこうの御むすめ、御たうのくわんはくみちなかのきたのかたにてましますは、それへまいりつかへしを、御子しやうとうもん院に、あひつきくわん女とありしなり。むらさきしきふと申なは、（2オ）一てうの院の御めのことうしきふにてありけるを、きさきへまいらせらるゝとて、「我かゆかりなり。あわれみ

たまへ」と、いともかしこきちよくにより、むらさき式部とめされしなり。むさし野、うたのこゝろとう。きよす□家の日記には、「とうしきふとかきたるは少ゆふけんならずとて、藤のゆかりの色なれば、（2ウ）むらさきのちをそう」とあり。又あるせつに、此女、五十四てうのその中に、むらさきの上の御ことを、ことにすくられてかきしゆへ、そのなありともいひつたふ。そのきうせき、おほきまちなみ、京極にしのつち、とうほくいんのむかひなり。此寺しやうとうもん院の、御所のあと、そきこへける。さてまた（3オ）しきふはか所、むらさき野、雲林院ひやつこういんのみなみにて、おのゝたかむらはかのにし、されはむらさきしきふなも、そのほとりのいふかんに、かねてこゝろやしめけんとしやうやう院もの給ふなり。

此物かたりのほつたんは、にしのみやの左大臣こうめいこうと申せしは、たいごの御子にてましますか、（3ウ）むらさき式部おさなきより、いつくしき物におもほして、てふあひあさからさりけるを、おもひの外にかのおと、ださいのそつにうつされて、ちんぜいへさせんし給ふを、式部かなしきことにして、ふかきおもひもむらさきの、したにこかれてなかく比、天りやくの女十の宮、せんしないしんわうと申（4オ）せしは、かもよりおりみたまひつゝ、大きい院にておはせしか、くわんこうのきさいの宮へ、「さるへきそうしたまひてよ。つれくまきれ侍らん」と御しやうそのありし時、「世にふりたるはいかならん。めつらしからん一ふしを、しきふそ

こにとともかくもはからいてよ」とおほすれば、つめてよきことに(4ウ)して、「こうめいこのの御ことを、さいしやうさんげにか、はや」と、まつ石山にまいりつ、「ことしやうしゆのきせいして、七日さんろうしたりしに、比は八月十五やの、めい月こすいにうつろいて、千さとの外もくまなきに、かくへきそうしのしなくの、しきふかむねにうかひしは、「まことくわんせおんほさつの(5オ)御りしやうそ」とありかたくて、「わすれぬさきに」と佛前の、はんにやのうらをひるかへし、まつすまあかしをかきしなり。それによつてすまのまきに「こよひは十五夜めい月なりけりとおほしめしいて、」とあり。(かま(二)字輸入(一)をもむ)それより前後をつくりたし、六拾てうにと、のへて、きさきの宮へたてまつれば、(5ウ)こん大納言かうせいにせいしよをせさせ、ほうしやう寺の入道殿のおくかきにて大斎院へまいらせらる。(て、や)ことしやうしゆのその、ちに、はんにや一ふをむらさきしきふ一筆にしよしやしつ、ほうのうしたてまつるよし、(を)吉なりこののが、いにも、くわしくしるしおき給ふ。

すべて此むらさきしきふ、くわん(6オ)おんさつたのけしんにて、女人のりんゑあさからぬ、くかひのまよひをすくわんと、しやうくほたいのひかりをやはらけ、げくしゆしやうのにこりにしみ、ちりにましはりたまへとも、あらゆるくんしの五しやうのみち、さてしやくもんの五かひのほうも、さらにき、み、とおふして、くちのこ、ろにいたり(6ウ)かたし。それをたつねてしらんにも、女人はひとにうとくして、ちしや上人にもちぐせねは、しよきやう

むしやうのいわれをも、せしやうめつほうのことわりも、(せ)なにとしるへきたよりなし。こ、を佛の御ぢひにて、かりにおうなのかたちとなり、たやすきやまとことほにて、れんほ(7オ)あいしうゆふけん、ひくわらくやうのなかめより、おろかなるをもおのつから、まことの道にをしへ入、くんしんして、ふし、ふうふ、ほうゆうのじんぎれいちしん、又はしやうしういてんへん、じやうすいふてうのあわれをしらせ、それより十そうちうたうの、うもんくうもん、やくうやくくう、ひうひくう(7ウ)の四もんにも、心をよせん中たちにて、此物かたりの六拾てう、すなわちてんたい六十くわんにひやうせるなり。

た、大かたにきく人の、「けんしかうしよくはかりにて、女のみるへきことならず」といへるはこ、ろあさきなり。(礼義)れいきをた、す四しよ五きやうにも、なをあんよくのことをかく。しかれば(8オ)みんのちうわうは、たつきかいさむることにより、しうのゆふわうは、ほうしかこのむゆへにまかす。ゑつのこうせんこくのうれい、たうのけんそうはくわいのかなしみ、これみなあんよくふどうによつて、ひさしからさるいましめなり。此物語も猶おなし。

かのほそとにあこかれいてしおほる月(8ウ)夜にしく物もなき露のあいたのかり枕、ゆくゑはすまのうらみとなり、しんてんのからねこのなかききつなを引出し、し、うかくいのやちたひも、かへらぬむかしかりにて、いつの時にかいひはてん。身を浮舟のよるへをも、しらてた、よふ水のあわのきえかへりにし世のうらみ、

つら（9才）しといふもあまりあり。是又こゝろかるきにて、我身をたためたためしそと、のちの女のをしへなり。

またうつせみのあまころも、ひとへにていしよのみちをたて、しふにまみへぬこゝろさし、たれかはこれをほめさらん。さて、うすくもの女院の一夜のゆめのまとひより、身をうき物に（9ウ）おもひこり、御世をそむき給ひしも、これらそまことのけんしんなる。あさかほの齋院の、おりゐの後もいつしかと、いつきの宮をかことにて、なひきたまはぬつれなきも、けにたくいなきこゝろかな。さて又うちの大君の、我身にかへてはらからを、思ひのやみにかきくれて、（10才）此世をはやうし給ふも、いかてあわれのあさからん。これみなせんあくのふたつのすしをわきまへ^{（下）}ことはいさめなり。

もつとも女のまなはんに、佛法せほうのみちしるへ、何かわこれにまさるへき。ことはこうしのさてんによせ、こゝろはさうしくうけんにて、いつれの御時にかと、たゝ（10ウ）おほくとかきいたし、あるにもあらずなきにもあらぬは、木ゝの、ことのは、一ふにわたるかんしんにて、うたかた夢のうきはしを、かきなかつたる筆のうみ、はなはたひろくそこふかし。されはほとけの三しゆのせつほう、ほさつの六としやうもんのしたい、ゑんがくの十二いん（11才）ゑんまでみな此ことにさとらしむ。まことにじんくみめうなり。「おもへはくふしきなり。此世一せのことならし」と、かもの長命^{（マツ）}かんにたえず、しゆんせい^{（マツ）}のきやう六百番の哥合のそのはんにも、「かじんのけむしみさらんはいこんのこと」、そか、れ

たる。

くわんこうの初つ（11ウ）くり出、けんわのけふにいたるまで、およそは六百十よねん、時うつりことされとも、代くのけんわうちしん、いつれかこれをしやうひしたまはさる。いわんや女のみとなりて、何おろそかにおもふへき。此物かたりにこゝろをかけ、あしきをはあしきとしり、よきをはよきとこゝろ（12才）ゑて、くわんせんちやうあくしたまは、神めい佛たのおうこなく、此世のゑいくわとこしなへに、つゐにはりやうせんしやつこうの、めうほうれんげのうてなのうへに、しんによほんがくのしゆじやうめうらく、ゆめくうたかひあるへからすとそ。（12ウ）

【第二部 『源氏物語』の人々】

1 桐壺帝の系譜

そもく大しやう天わうと申は、きりつほの御門なり。御おと、は、せんほう、も、その、式部卿、女三ノ宮、女五之宮、是迄五人^{（桃園）}なり御きやうたい。しかるに大しやうてんわうは、あふひのまき^{（巻）}に御くらゐを、朱しやくにゆつりおわしまし、榊の巻にほうきよなる。御子十人をわします。朱しやく、六条、ひやうふ（13才）きやう、れいせい^{（マツ）}いん、そちの宮、八のみや、式部卿、女市宮、女二宮、女三の宮とはせん齋院。

代つきのわうし朱しやく院、きりつほの巻にとうくう、あをひの

なり給ふ。其御母の藤壺は左大しんの御むすめ、人より先にまいりつゝ、やん事なくしておわししか、あかしはらの中宮に御おほへけおされて、女二之宮をまふけおき、つるにはかなくなり給ふ。御きやう（17ウ）たいに大くら卿、しゆりの大夫もおわすれと、それさへひとつはらならて、女二ノ宮の御よすか、誰といふへき人もなし。朱しやくの御すへ、是迄成。

たい二之御子はけんしなり。きりつほのかうゐはら。三つにて御母うせたまふ。十二にてうゐるかうふり。こうらい国のさう人のつけたりしそのゆへに、光けんじと申なり。は、（18オ）木、のまきに中将、紅葉のかにしやう三ゐ、御かの頃はさい将（相）中将、あふひに大将かけたまふ。過にし花のゑんのころ、入かたしらて見し月の、空にあこかれ給いしに、柳の巻にかんの君、御里出の時待て、かたみに心引あみの、たひかさなれるちきり故、年廿五の春のころ、津の国すまのうらめしき、海士のなけきを御みにつみ、（18ウ）又廿六やよいには、はりまのあかしのうらつたい、おかへの宿のかり枕、うきをなくさむよすかにて、君廿七の八月には、宮古へ帰おわしまし、御よろこひも数の外、こん大納言になり給ふ。みをつくしにない大しん、薄雲にてくるまのせんし、をとめの巻に大しやう大しん、ふちのうら葉に大しやうてん（19オ）わう。かくたのしみをさわめつゝ、よもにあまねき御さかへもかきり有かな、みのりの巻にむらさ木（き）のうへの別故、心のやみに雲かくれ、光きえさせ給ふよし、にをふの初に書出せり。

御子三人おわします。

まつ夕きりの御母は、せつしやうの御娘、あふひの上と申成。あふひのまきにたんしやうし、程なくは、に（19ウ）（○重ネ書き）にをくれつゝ、みをつくしにわらはにて、うち春宮のせうてんし（内）（内裏ト春宮トノ上殿也（行間書入））、をとめのま木（き）にけんふくし、あさ木にて立帰、大かくれうに入給ひ、大かくの君とよはれつゝ、その秋のちもくには、かうふりをたまはりて、しゆしやく院のきやうかうに、し、うとそ聞へける。玉かつらに中将、ふちはかまにさい将、藤のうら葉にこん中納言、若な（20オ）の上に右大将、同下ニは大納言の左大将に成給ふ。にほふのまきに右大しん、大将もとのことくになり、竹川に左大しんの左大将とぞ申ける。

御いもうとの中宮は、みをつくしの三月に、あかしの浦にて生れつゝ、松風の巻に三つのとし、は、上と登給ひ、大井の里におわせしか、紫（うす雲）の御子と成て、二条の院へうつろ（20ウ）い給ひ、十二にてふちのうら葉の御しゆたい、しけいしやう（うす雲）にこそおわしけれ。若なの上に十四にて、わうしたんしやうおわします。みのりのまきに中宮、のち大宮とぞ申ける。

扱又かほる大将の、御は、朱しやくの女三の宮、かしわ木に生れ給ふ。六条の院の御申にて、れいせい院の御子と成、にをふの巻にけんふくし、四ゐの（21オ）し、うと聞へけり。同じき秋にうこんの少将。其頃年は十四才。同じき巻に三ゐして、さい将の中将なり。竹川に中納言、やとり木に秋の頃、なをし物といふ事にて、こん大

納言に成給ふ。

扱又源氏の御まごに、夕きりの十四人。とうくうの女御、中の君、四の君、五の君、男子にはうゑもんのかみ、う大へん、けんさい(21ウ) 将中將、四の少將、是八人、皆三条のうへのはら。三の君、六の君、中納言、〔字、頭、藤原氏娘也〕とう中將、〔藤原氏娘也〕とう内しはら四人なり。し、うのさい〔相〕、七良君、此貳人はは、しれす。

然〔は〕は女御六人なり。一は春宮の女御、二は二のみやの北の方、三四五之君、三人は夕きりの巻にみゆ。六之君と申せしは、落葉のみや(22才)のやうしにて、やとり木ににをふ宮かよいそめ給ふなり。〔右〕うゑもんのかみと聞しは、若なの下に朱しやく院御かのふかく有し時、わらはにてまいりにき。おなしきまきに女かくの夜、横笛を吹しとぞ。にをふの巻ののりゆみにしゆつしせし人なり。にをふ宮あけまきに、うちにて紅葉見たまへは、(22ウ) 中宮の御前に参たりしも此人なり。

中納言は二良君。なつの御方やうしにて、同じ〔七〕に朱しやくの御賀の時、しかくにもたう日にも、さて又におふのりゆみにも、あに君と諸とも〔右〕にうちつれ出ししたまへり。

其おと、〔右〕のう大へん、是ものりゆみにしゆつしせり。若なの下に見えたりし三郎君、是(23才)也や。しるか本に、にをふ宮はつ瀬まふての有し時、おとうとし、うのさい〔相〕將と宇治へ参給ふなり。けんさい將〔相〕の中將は、本くら人の少將、竹川に三ゐして猶さい將〔相〕のちうしやう。又まほろしのまきにも、二人同しほと〔右〕のにして、わ

らは〔殿上〕天上し給ふは、此人々の事成へし。

さて又とうの中將は、竹川にけん少將、やとり(23ウ) 木に、にをふ宮夕きりの六之君にかよひそめ給ふ時、ち、夕きりの使にて、「待よひすきて見えぬ君かな」とつたへ申せし人とかや。しいかもとにとう少將〔右〕ときこへしは是なれや。

扱、四の少將者、一本之宮御〔二品〕のふとて、よ川之僧〔二品〕ずへ中宮之使せし人なり。竹川に兵衛之佐、しいかもとにくら人の(24才) ひやうへのすけとそ申ける。

さて又あかしの御はらにも、〔今上〕こんしやうの御子五人なり。かをるの御子た、ひとり、すもりの三ゐのはらとかや。けんしの御すへ是迄成。

つきに、ほたるのしき部きやう、しよきやうてんの四之宮とて、紅葉のかにしうふうらくうたい給いしそつの宮、をとめの巻に、朱しやく院きやうかうの有し時、(24ウ) 兵部卿とそ申ける。まほろしの巻迄〔脱力〕をはしか、雲かくれにそうせたまふ。

ほたるの御子唯三人。三ゐのし、うと申せしは、父宮のつたへにてひわを目出たくひきたまふ。梅かえのはるのころ、六条の院よりも父宮の使にてまき物取二出給ふ。其次二わらは宮此貳人、若なの下に御かのしかくありし時まんさいらくをまひ給ふ。

貳(25才) 條のおと、の五の君はらの末のひめ君斗〔二品〕とそ、まきはしらのはらなれや。父宮なくなり給へれば、母にぐせられ紅梅〔二品〕の弟のもとへおわしたり。わりなく物はぢし給へと、その御けわい、心

はへ、さらにむもるゝさまならて、にをふ宮おほしめし、おとうと太夫の若君に尋給いし君とかや。

ほたるの御孫三人とは、中将、大君、中の君。何も（25ウ）し、うの御子成。

中にも當（頭）の中将は、もとは兵衛の佐なるを、にをふみやいたわりてとう中将になし給ふ。

その姉の大君は一ほんの宮に参つゝ、御ひわのしに成給へは、三ゐになさせおはします。にわふけそうし給へとも、花くしき御心ふさはしからすやおほへけん、かをるのしのひ給ふれば、其御方にうつろひて、若（26才）君ひとりうみ給ふ。其後もにをふ宮あやにくなる御心、世の聞へも物うきに、朱しやく院の四ノ宮の大うち山にましましては、それへしのひ参つゝ、ともにおこなひ居給へり。すもりの三ゐ是なれや。みめうつくしくひわたえにひき給ひける人とかや。（傍書に「妙」とルビあり）

その妹の中の君、一ほんの宮におわせしを、（26ウ）におふのしのひ給いしか、あねの三ゐに御心うつし給ひて、其後に中の君には（全）こんしやう（上）の二の宮かよひたまひけり。ほたるの御末是迄成。

れひせい院の御母はふち壺にて御はします。紅葉のかに御たんしやう、あふひの巻にたうくう、みをつくしに御そくい、若なの下に御くらいを朱しやく院の御たいし（今上）こんしやうに（27才）ゆつり給ひけり。

れいせいの御子三人なり。

女市（二）の宮と申せしは、ちしのおとゝの御娘（三）こう木（四）てんの御はらなり。又女貳（二）之宮、男宮、是ふたりの御母みやす所と申せしは、ひけ黒の御娘、玉かつらの御はらなり。扱五之宮に又ひとり、その宮とておわせしは、ほたるのまきのむまはの時、兵部卿には御（27ウ）けはひおとり給へる宮なりと、なつの御かたのたまふなり。

また、宇治の八之宮、朱しやくの御母（愛）こうきてん、是をよつきとおほせしに、源氏の君の御覚にて、れひせいそくいありしより、御心ほそき折ふしに、京之御所さへ焼ければ、世をうち山に引籠、しゐかもとにてうせ給ふ。ぞくにておこなひましましては、うはそくの（28才）宮とも申なり。御子三人おわします。あけ巻の大君、中之君、三の君とは浮舟なり。

かの大君は父宮のうせ給いし其後も、かをるあこかれたまへとも、つゐに御心つよくして、あけまきにうせ給ふ。

御妹之中之君、かをる御道しるへにて、にをふ宮かよひそめ、さわらひのまき（より）なにも二条之院にすみたまふ。後夕きりの六之君におふ（28ウ）かよわせ給へとも、中の君の御覚（愛）浅からすして、やり木に若君をまふけ給ひけり。

三の君の母うへは、ひたちの守かめ（つ）のとなりて、下りたまへは此君も、いとけなき時くせられて、ひたちへくたりたまいしか、後あつまやのまきの頃、としへて都へおはせしを、かおる大將見そめつゝ、かの大君のかた見そと、宇治に（29才）すへおきたまいしを、うらめしきにおふ宮、すゝろにしのひ給ひつゝ、あこかれかよひた

まへれば、ふた道の思ひかなしさに、うち川に身をなけしを、こた
まにとられ、ひやうとう院の枚の木かけにすてられて、うつし心も
なかりしを、よ河の僧すにかちせられ、少いき出給へれば、そうす
の妹、我かこにせんと小野にいさなひ置(29ウ)給ふ。常に手なら
ひしたまへは、手ならひの君とも申なり。其後ゆめのうきはしに、
かをる大将き、給ひ、かのてならひのおとうとの、ひたちの守か子
をやりて、とはせたまへとはらからも、しらぬになしていらへせず。
のちに山路の露わけて、つゝには尋あひ給ふ。

式部卿の宮わ又、かけろふの巻にうせ給ふ。扱こそ御名(30才)
をかけるふの式部卿とそ申なり。此御むすめた、ひとり、宮の君と
てましますは、一ほんの宮におわせしを、におふやかをる大将のほ
のめかしたまふなり。

女一も女二も御すゑなし。女三之宮わあふひの巻に加茂の斎にお
たまへり。御門之御すゑ是迄成。

2 桐壺帝の兄弟たちの系譜

さてせんほうと申せしは、左院(殿)のひとつ御はらなりと、あふひ
(30ウ)の巻にしられたり。

秋このむ中宮とて、御子壺人おわします。榊の巻に十四にて、い
せさいくうに立たまふ。みをつくしに世かはりて、都へ帰たまいまし
を、源氏御おやさまにして、ゑ合にしゆたいあり。梅壺(ツボ)にすみ給ふ。
おとめにささきに立たまふ。みのりにくわうたいくわうくうなり。

其御母は六条のみやす所と申なり。大しんの(31才)御むすめにて、
十六のとしまいたまふ。十七のとしさいくうを、まうけさせたま
いしか、廿のとしせんほうに、ちきりはかなくたちおくれ、三そち
の秋のすゑつかた、御子にそいて伊勢の国、竹の都ゑおはし、か、
帰らせたまいてみをつくしに、やかてはかなく成給ふ。

扱も、その、式部きやう、あふひに御けいみたまひて、うす雲に
うせ給ふ。(31ウ)其御娘朝かおは、榊に加茂の斎院、薄雲に父の
御ふくにて、加茂よりおりいたまひつ、御おは女五の宮とも、
も、そのにこそおわしけれ。光けんしわ折(む)く、に心をつくしたまへ
とも、つれなくてこそすきたまへ。

三之宮(三)ときこへしは、せつしやうの北の方、大宮と申せしか、藤
袴にうせ給ふ。ちしのおと、も(32才)あふひの上も、みな此宮の
御はらなり。女五のみやにわ御末なし。御門之御名(流カ)は是迄なり。

さてせんていかうするは、けいつに大上天王の、御兄とかくほ
んも有。すゑいくたりかおわすらん。此物語に見えたるは、先せん
ていの式部きやう、か、やくひの宮、けんしの宮、た、三人そおわ
しける。

此せんていの式部卿、若むらさき、紅葉の(32ウ)か、榊のまき
の頃迄も、兵部きやうにておわします。おとめの巻に式部卿、後大
宮と申つ(つ)、若なころまでおはせしか、いつかわかくれたまひけ
ん。

その御子達、けん中納言、中将、し、う、みんふの大夫(天輔)、ひけ黒

のきたの方、紫の上、大女御、是まで以上七人なり。

けん中納言はふち袴に、左兵衛のかみとかや。若なの下には（33才）中納言、梅かえの衾の頃、明石のひめ君しゆたいとて、六条の院のおほせにて御さうしかきたまふなり。

中将、し、う、みんなの大夫、是三人は、御いもうとのひけ黒のふる里を立はなれ給ふ時、むかひに参し人なり。

此ひけ黒の御うへは、物のけめきてれいならず、なやみくつをれたまへれば、猶大将の御心、空にうかる、玉かつら、（33ウ）むすほをれたる有様を、みるもこかる、むねの火の、ひとりのはいをうちかけし、けふりのはてははかなくも、つゝに中たゑ給ひけり。

たいのうへの御なからい、またいわけなき若草の、若むらさ木のまきよりも、源しの君にむかへられ、あふひの巻の末つかた、御とし十四の神無月、時雨の雨のふる事も、あらたま（34才）りての新枕、おもひの色か紫の、藤のうらははのてくるまは、目出度さかへ、御おほへも、御法の巻に秋風の、はかな木露ときゑたまふ。

御妹の大女御、乙女のま木にしゆたひあり。みおつくしには此君を、中の君とは書たれと、あまたか中之御すゑなり。

式部きやうの御妹、薄雲の女院は、せんていの四の宮なり。きりつほにしゆ（34ウ）たい有、藤壺に居たまへり。是そか、やく日の宮なり。紅葉のかのきさら木にきさきにたち、こうきてんおこゑ給ふ。榊のまきのとしの暮、いんかくれさせたまへれば、次のとしより道に入、みをつくしに大しやうてんわうのそんこうになつらへて、

みふくわらりましますか、薄雲にうせ給ふ。

其御妹けんしの宮、は、はすしなきこうい（35才）はら、朱しやくのいまたとうくうより、ふちつほの女御にて、女三ノ宮をうみたまふ。御世をはやうしたまへり。

是まで大かたせんていの、御すゑくもおわりぬへし。

3 左大臣家の系譜

れいせい御世のせつしやうは、きりつほの巻の左大しん、源しかうふりまいらせし、引入之おと、とそと、身をつくし巻に（35ウ）はせつしやう大しやう大しんなり。その頃六十三とかや。うす雲の正月うせ給ふ。六十六のとしなるへし。

せつしやうの御子たち、宮はらに二人あり。ちしのおと、あふひの上。又外はらのとはらに、左中へん、当大納言、中宮の大夫、是五人。

中にもちしの大しんは、きりつほのまきにはくら人の少将、は、木、に（36才）とう中将、もみちのかには正四郎下、あふひに三郎の中将、須戸の巻にはさい将なり。みをつくしにこん中なこん、うす雲にこん大納言、やかてこんゑの宇大将、をとめの巻に内大しん、おほきおと、の御ゆつりにて、ないらんせんしかうふりて、ふちのうら葉に大しやう、大進、若なの巻にち（36ウ）しのひやう、雲かくれにうせ給ふ。

ちしのおと、の御子たち、かしわ木、こう梅、こうきてん、四の

君はらに是三人。又はら／＼の御子達、雲井の馬〔衍カ〕の玉かつら、さへもんのかみ、とうさい将、くら人の小少将、八の君、あふみの君まで十人なり。

かしわ木のゑもんの守〔督〕、みをつくしにわらはにて天上〔殿上〕をゆるされ、お〔37才〕とめ〔にたカ〕ひとりの少将、こちやうには岩もる中将、かゝり火にと〔頭〕う中将、若なの上にさい将のゑもんのかみと聞へしか、おなしき下には権中納言、二ほんの宮の御事を思ひみたれてしまふ、今をかきりとみえし時、かしわ木に敷の外のこん大なこんになされしか、ほとなくむなしくなりたまふ。

扱〔カウ〕紅梅の大しんは、〔37ウ〕榊のまきにわらはにて、院〔院〕ふたきのみわけを、ちゝ中将のし給ふひ、たかさこをうたいし君とかや。みをつくしにけんふくし、はつねにへんの少将なり。若なの上にとうのへん、かわ木のいまわの時、一條の宮の御事を、是にい、おき給ふなり。すゝむしにれいせい院へ参給ふも此人なり。かう梅にあせちの大納言、竹川に〔38才〕う大しん、うこんの大将かけ給ふ。〔四〕四か本にはにをふ宮、はつせまうての有し時、御むかひに参たる、とう大なこんも是なるへし。さきのはらにはひめ貳人。かうはいの巻にとうくうの、れいけいてん中の君、すへの太夫の若君は、まきはしらのはらとかや。

さて御いもうとかうきてん、みをつくしの八月に、十二にてしゆたいあり、れい〔38ウ〕せい院の女御にて、こうきてんにおわしまし、女市〔女市〕の宮をうみたまふ。

又ことほらのひめ君に、雲井のかりは、夕きりのおと、のたいになりたまふ。なんし四人、女子四人、以上八人うみ給ふ。三しやうのうへと申なり。此ひめ君の御母は、ちしのおと、のりへつして、あせちの大なこんのきた〔39才〕のかたになりたまふ。

さて玉かつらときこへしは、は、夕かをの上とかや。三つにておくれたまひつ、四つのとしには夕かをのめのとにくせられ、しらぬい〔ツ〕ひのつくしに年をへて、みやこに上りたまひしを、けんしに尋とられつ、ふちはかまにないし〔高〕の守、まきはしらにひけ黒のきたのかたになりたまふ。〔39ウ〕なんし三人、女子貳人、御子五人うみたまふ。

さへもんのかみはかゝり火に、とし〔ウカ〕のし、うといひしなり。〔藤宰相〕とうさい将は若なの下に、加茂のまつりのかへるさを、見たまひけるは此人なり。またくら人の少将、此人〔人〕には、にをふ宮夕きりの六の君を見せめ給ひて、三日の夜さふらひたりし人そ〔40才〕かし。又まほろしの巻にも、夕きりの君達のわらはてん上したまふ時、御おちのとはらたちとて参たり〔人〕なり。また夕きりの大将の小野にかよひ給ふよし、ちしのおと、のき、たまひ、「あわれとおもひうらめしときく」と、おち葉〔高橋カ〕のまひつかはすも、此少将を使なり。おとめの〔40ウ〕まきに、少納言、しゝうの大夫、ひやうゑの介〔佐〕、大夫といへるも、此人〔人〕の事とかや。八良君はまきはしらのたうかの所にありしなり。ふちのうら葉のきやうかうに、十斗にていつくしく、

かわうをんおまひしなり。

あふみの君の其母は、たれともしら（41才）す。なのり出、したとに物いひ、こゝろさまかたはらいた木人（き）とかや。是にてせつしやう大しんの御すへくもおわりぬへし。

4 右大臣家の系譜

二しやうの大しやう大しんは、しゆしやく院の御おうち、こうきてんの御父（ち）なり。う大しんにておわせしか、後は大しやう大しんにてうせ給ふよし明石（あかし）にみゆ。御子あまたおわします。こうきてんの大きき、（41ウ）四の宮（やま）、五之君、六のきみ。おとこには、とう大納言、四ゐの少将、左中へん、是まで大かた七人なり。またいほんには数もあり。

まつこうきてんの大きき、しゆしやく院の御ほき也。あふひにくわうたいこくうにてうせ給ふよし、若なにみゆ。ちしのおと、の四の君（むか）は、かしわ木、かうはい、かうきてん、みな此はらの（42才）御子なり。ほたるのみやの五之君（むか）は、三ゐのし、う、わらは宮（みや）古へおなしく此はらなり。

六之君ときこへしは、花のゑんのきさらきに、ひかるけんしのわりなくも、かの（こ）きてんのほそとのを、しのひた、すみ給ひしに、「おほる月夜に（こ）なるはなし」と、みつの戸口を出たまへは、おもはぬちきりあさからて、たかひに（42ウ）あふきをとりかわし、おきわかれ給ふ也。あふひに朱しやくへまいりつ、みくしけ殿ときこへし

か、榊の巻の三月に、ないしのかみになり給ふ。若なの上にしゆしやく院、御山こもりのありし時、御かざりおろし給ひけり。

とう大納言の子は二人、とうのへんときこへしは、こいんかくれたまいて後、源（43才）しの君も世の中を、物すましくおほしなり、雲林院におはせしか、ひかすへて後（は）る宮へ、参給ふを見まいらせ、「はつこうひをつらぬけり」と、口すさみつる人とかや。そのいもうとのおはせしは、朱しやく院の女御にて、れいけいてんにそおはしける。

四ゐの少将、左中へん、此貳人の人（に）は、こうきてん（43ウ）より君達の御くるまともいてけるに、御おくりせし人（に）と、花のゑんにそしられたる。此少将は、ち、おと、花のゑんの三月に、ふぢのゑんしたまいて、光源しの御むかひに参たまいて、「わかやとの花しなへての色ならば」とつたゑ申し、人とかや。かの中川のやとりせし、のきはのおきをむす（44才）ひしも此くら人の少将なり。是にて二條の大しんの御すゑくもおわりぬへし。

5 鬚黒の子孫たち

ひけ黒と聞（き）ゑしは、う大しんの御子なり。しよきやうてんの御あ（今）にて、こんしやうの御おちなり。こてふのまき（上）にう大將、若なの上（上）に左大將、おなしき下にはう大しん、大將もとのことくなり。しんていの御うしろ（44ウ）み、大しやう大しんになり給ひ、雲かくれにうせ給ふ。

御子八人おはします。とう中納言、二良君、まきはしらの君、三人はせんていの式部きやうの女一の君の御はらなり。うひやうゑの〔右大辨〕守、う大へん、とうの中将、女御の君、内しのかみ、是五人、玉かつらの御はらなり。

とう中納言はまきはしらに十斗(45才)にててん上す。竹川の正月にまゝ、はゝの玉かつらへおわしまし、人とかや。やとり木の藤のゑんにまいたりたまふも此人なり。

そのおとうとの二郎君、まきはしらに八つ斗、「母のかたみにみるへし」と、父のたまいし人とかや。

まきはしらとなつけしは、母君のりへつの時、「まきはしらよわするな」と、な(45ウ)こりおしひめ君なり。ほたるの宮のたいとなり、宮なくならせ給へれば、かた見の御子もろともにかう梅の大なこんへうつるいすませたまひつゝ、若君ひとりうみ給ふ。

ないしはらのひやうゑのかみは、若なの下に女かくの夜、そのうふへふくわらなり。朱しやく院の御かの日、れうわうをまひたまふ。

竹(46才)川に左こんの中将、おなしき巻に左ひやうへにてひさんぎときこへけり。ふちのゑんに御まかなひ取おこなゑる人となるへし。う大へんといふもあり。此貳人はわらはにて、六條〔六〕の院の四十の賀を玉かつらのし給ひて、若なまいらせたまいしひ、あいくしておわせしなり。又朱しやく院御かの比、しかくにも(46ウ)當日〔上〕にも参たりし人とかや。又竹川にしゝとあるも、同じきまきのたう中将も此う大へんの御事なり。

其御妹、れいせひの女御にておはします。竹川の正月に院へ参たまふなり。夕きりのおとゝの御子くらんと少将の心つくし、人とかや。其いもうとは、母上の内し〔尚侍〕の守を湯つりにて、(47才)内へそまいたりたまひけり。〔尚侍〕に「ナインノカミ」とルビ

ひけ黒の御すゑ是迄なり。其外人の名おほけれど、此物語にしなもなく、けいつにおよはぬ人、おは、くたくしさに書もらしつ。

6 明石の入道と按察使の大納言の一族

明石の入道、あせちの大納言、此貳人は大しんの御子なり。

あかしの入道、もとはこんゑの中(47ウ)将なりしか、一とせはりまの守たりしか、にむおはりてのち、こんゑをすてゝかの国にくたりて、あかしのうらにかしらをろしていたるよし、若むらさきの巻にみゆ。

そのむすめあかしの上は、袈風の巻に都へ上り、おゝの里におはせしか、おとめの巻に六条の院いぬいのまちへうつりつゝ、ふゆの(48才)おとゝときこへたり。

其御むすめ、明石の中宮は、みつの御としむらさ木〔木〕の御子となりて、それより後は、うへには見得たまはず、初ねのまきに九つにて、はしめて御ふみありとかや。藤のうら葉の御しゆたいには、むらさきのうへそわせ給ふ。三日過て明石の上むらさ木〔木〕のうへにたちかわり御心のまゝにそい給ふ。若(48ウ)なの上にこんしやう〔今上〕のたい子をまふけさせ給へは、おうち入道、「今は思ふ事なし」とて、明石

のうらをはなれ、たへたるみねにこもるよし、きたのかたのあま君、またむすめのかたへもかきをくり給ふなり。

此あま君と申せしは、中つかさのしんわうの御まことかや申ける。

また入道のをとと、あせちの大なこんは、きり(49才)つほの
 こういの御ち、なり。こういの御あに、雲りん院のりつしとてまし
 ますよし、榊の巻にしられたり。

7 花散里の一族など

大しんの御むすめ、れいけいてんと申せしは、きりつほの天わう
 の女御、その御いもうと三之君は、けんじまみへ給ふよし、いつれ
 も(49ウ)花ちる里に見多たり。

かの三の君、おとめの巻に六条の院のうしとらのまちにうつりた
 まひて、なつの御かたときこへたり。夕きりをやしない給ふ。また
 のちに夕きりの二良君、三良きみをもやしない給ひけるとなり。大
 しんの御むすめぞ、宮(八段カ)のきたのかた中將の君はきたのかたのめいな
 り。きたのかた(50才)うせ給ひて、うき舟をうみたまひ、のちひ
 たちのかみのめとなりて、子ともあまた侍りけり。

8 小野の尼君の一族

又小野之あま君は、ゑもんのかみのつまなるか、むすめ一人うみ、
 ゑもんにおくれ、むすめおは少將にあわせたりけるか、是もはかな
 くなりければ、は、大あまのをの山に(50ウ)世をすておわしまし、

ゆへ、ともにおこなひすみたまふ。よ川のそうす、ひたちのめ、き
 のかみのは、君もみなはらからときこへける。

此きの守はかをる大將につかへたる人なり。かをるてならひの君
 をうしなひてなけき給ふよし、おのへきたりてかたりしを、てなら
 ひの君物こしにき、給ふと、てならひの巻(51才)にみ多給ふ。

9 その他の系譜ある人々

あせちの大なこんといふ人あり。そのきたのかたはきた山のそう
 つのいもうと、のちにあま君といへり。そのひめきみ、せんていの
 ひやうふきやうに見得たまひ、むらさきのうへをうみたまふなり。

またあせちの大納言(納)といふ人あり。そのむすめ子せつ(五節カ)つ(ツ)の君な
 り。おとめにまひひめにまいり、そのま、たいりに居たまふ。ほか
 はらのむすめとあり。

ひたちの助かむこ、左こんの少將は大將の子となりとあつまやに
 み多たり。

こん中なこんけん(兼右)うへももんのかみとてあり。その子、うつせみ、
 (52才)こきみとて二人あり。

ゑもんのかみうせてのち、うつせみは伊よのすけかめとなり、け
 んし中川の御かたかへの時見そめたまいし人なり。伊よのすけひ
 たちになりてくたる時、あひくしてくたり、せきやの巻に京へかへ
 り、やかてつまにおくれ、あまになりしかは、けんしいたわり給ひ

て、二条の院のひかしの院におかせ(52ウ)給ふなり。
 そのおとうとのこきみは、源しうつせみへ御ふみつかいせし人。
 是もあねとともにひたちゑ下り、せきやゑ(マ)のほりしなり。のちにさ
 ゑもんのすけときこへたり。
 此ほか人くゝなをおゝしといへとも、かくにおよはざるをは、是
 をりやくするなり。(53オ)

君か代は ちよにやくゝを さゝれいしの

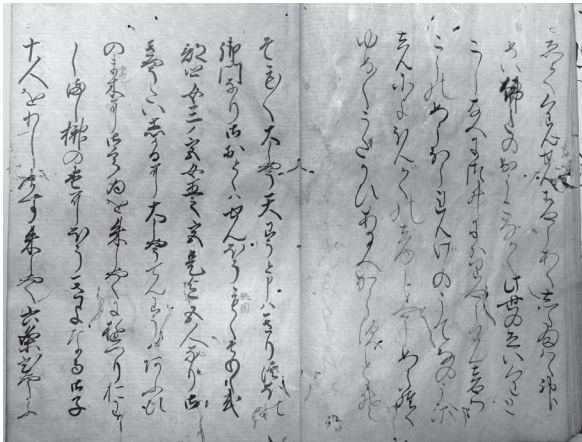
岩をとなりて こけのむすまで

勢陽 鈴鹿社神主本(朱)

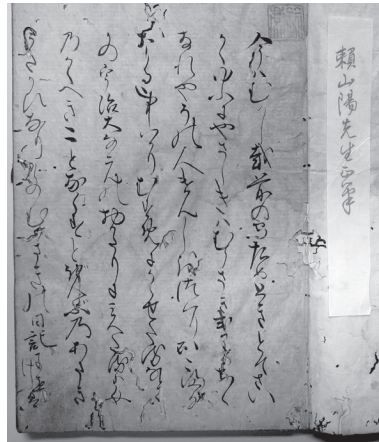
紙かず 五十三枚(53ウ)



表紙



第一部末尾と第二部冒頭(12丁裏・13丁表)



巻首(1丁表)と極札

〔解題〕

『源氏小鏡』と言えば、中世に作られた代表的な『源氏物語』梗概書で、写本はもとより、近世には、古活字本や整版本、また絵入り版本として刊行されて広く世に流布したことが知られている。

しかし、ここに紹介する架蔵の一本は、梗概書の『源氏小鏡』とは異なる別の書である。『源氏物語』の簡便な入門書、手引書の類であることは共通するが、物語の筋を簡略に記したものでなければ、連歌愛好者の利用のために作中のキーワードを抜き出したものでもない。『源氏物語』の執筆契機や成立に関する伝承を紹介し、作品の主題や意義について仏教的観点から論議した部分と、作中の登場人物たちの系譜について記述した部分の二部から成る。そのうち系譜部分は、故稲賀敬二先生が『源氏系図小鑑』と仮に名付けられ、中世における『源氏物語』享受資料の一つとして考察を加えられている(『源氏物語の研究—成立と伝流—』(昭42 笠間書院))。

『源氏系図小鑑』の伝本中には、本書と同様に二部構成になっている本も存在する。早稲田大学図書館蔵の『源氏抄』と題する写本がそれで、中野幸一氏によって全文が翻刻されている(『源氏物語古註釈叢刊』第五卷(昭57 武蔵野書院))が、同本は人物の系譜に関する部分が先にあって、本書とは構成が逆になっている。系譜部も論議部も本文に大きな相違はなく、同一系統と見られるが、小異は少ない。あまり多くの伝本が紹介されているわけでもないことを鑑

みて、本稿では、架蔵本の全文を翻刻・紹介し、書誌事項を中心に簡略な解説を加えることにした次第である。

まず、書誌を記す。

写本・袋綴一冊。料紙はやや赤味があった楮斐混ぜ漉き紙で、縦二四・〇cm、横一七・三cmの大本。紺地に金泥で秋草模様を描いた表紙の中央上部に縦一三・〇cm、横三・五cmの枯草色無地の題簽を貼り、「源氏小か、み」と外題を記す。後表紙も同じ模様だが、前後とも剥落が進み、虫損も少なくない。但し、本文の判読にはほぼ支障がない程度である。前見返は本文料紙よりもやや白い楮紙だが、後見返は一面が黒ずみ、やや光沢を放っていて、銀泥が塗られていたと思しい。後見返の料紙には亀甲繫ぎ紋が施されているようだ。かなり豪華な装丁の本であったように思われる。内題はない。巻首上部に「鈴鹿」の方形朱印あり。一面七行書、一行は一五字〜二〇字で、大きな文字でゆったりと描かれている。ところどころに朱で傍書がある。多くは文中によく現れる漢字の宛て字の類に正しい文字を傍記したものである。本文墨付五三三丁。本文は第五三三丁表六行目で終わり、末尾の第五三三丁裏には、「君か代は ちよにやくを さ、 れいしの 岩をとなりて こけのむすまで」という、国歌「君が代」の元歌となった古歌が散らし書きで記され、のど下部に、「勢陽 鈴鹿社神主本」と朱書され、その奥に「紙かず五十三枚」と墨書されている。巻尾の朱書と巻首の朱印により、本書は伊勢国の「鈴鹿社」なる神社の神主の蔵書であったことが知られる。ただし、今の

とどこ具体的にどの神社であるかは不明である。「鈴鹿」印は神社名を示す印なのか神主が「鈴鹿」姓であったのかもわからない。もう一つ面白いのは、本書には「頼山陽先生正筆」と朱筆で描かれた細長い紙片が挟み込まれていることである。本書の筆者が頼山陽であることを示す極札のようなのだが、現存する頼山陽の筆跡とはまるで似ておらず、信用できるものではなさそうだ。

本書の内容が、大きく二部に分かれることは先述した通りである。前半の『源氏物語』についての総論部分を「第一部 『源氏物語』の作意」、後半の登場人物の系譜部分を「第二部 『源氏物語』の人々」として見出しを立てた。巻頭から第一一丁裏の六行目までが第一部で、一行の余白を置いて丁を改め、第一二丁表から第二部となる。この区切れ部分を除いて本文は空白も改行もなく記されているが、第二部の後半になると、一行の空白を置いたり改行がなされたりするようになる。最初の空白は、鬚黒の子孫に至って主要人物の系譜の説明が終わり、「其外人の名おほけれと、此物語にしなもなく、けいっにおよはぬ人々おほ、くたくしさに書もらしつ」(47ウ)と記した後にある。いかにも「以下省略」と書いてあるわけで、ここでいったん記事は終わっていたようである。ところが、一行空けて明石の入道と按察使の大納言の系譜の説明が始まるのである。明石の君の父であり、明石中宮の祖父である明石の入道は物語中の重要人物であり、入道の叔父(本書では入道の弟とするが、実は入道

の父の弟である)であり、桐壺更衣の父である按察使の大納言も物語開始時にすでに故人ではあるけれども、主人公の祖父であるから無視はできない人物である。

そして、按察使の大納言の説明が終わるとまた一行の空白を置き、麗景殿の女御とその妹の花散里の説明が始まる。さらに浮舟の母中将の君の説明が続く、その後にもまた一行の空白を置いて小野の尼君一族の系譜の説明がある。そして、また一行の空白を置いて、紫の上の祖母の夫である按察使の大納言について説明し、空白行なく改行してもう一人の按察使の大納言(五節の君の父)に言及、また改行して浮舟の継父常陸の介の婿左近少将、空蟬と小君姉弟の解説へと進み、最後に、「此ほか人々をおおしといへとも、かくにおよはざるをは、是をりやくするなり」(53オ)と、再び以下省略を宣言して攔筆している。この辺り、主要人物の系譜に属さないものの、物語中で無視できない人物を少しずつ思い出しては補足しているといった趣である。人物系譜部の成立過程を窺わせる記載状況だと言えよう。

ところで、早稲田大学図書館蔵『源氏抄』では、系譜部と論議部のいずれにも奥書がある。系譜部末には、

慶長十八年極月 日

交記作

とあり、論議部末には、

元和十年二月 日

とあって、それぞれ慶長一八年（一六一三）一二月、元和一〇年（二六二四）二月の成立であることを示すと思われる、系譜部については「交記」なる人物の作であることがわかるのである。

これに関して、中野幸一氏は、前掲翻刻の解説で、「本書は『源氏物語』に関する別個の二つの資料を合写して、仮に『源氏抄』という名を与えたものと考えられる」と言われているが、果たして全く別個の資料を合写したと考えてよいだろうか。それは、両資料の文体上の特徴が相似していることである。中野氏が指摘されている通り、系譜部は『源氏物語』の人物の系譜を大略七五調の律文で綴ったもの」であり、論議部は、「紫式部の伝記・旧蹟・物語執筆の動機などいわゆる「源氏のおこり」について、これもほぼ七五調の律文で綴ったもの」である。つまり、どちらも七五調の韻律を基調とした一種の美文調で綴られていることが共通しているのである。中野氏は「おそらく暗誦するに便ならしめたものと考えられる」と言われるが、全く別個に存在したものがたまたま同じような韻律で書かれていたので、暗誦にふさわしいテキストとして合写せられたと考えるよりも、もともとそのような目的のもとに同じ文体で書いた（あるいは書き換えた）と考える方が自然ではないだろうか。二資料の奥書の年次がわずか一〇年ほどの差しかないこともそのことを示唆しているように思われる。

論議部の末尾近くに次のような一節がある。

くわんこうの初つくり出、けんわのけふにいたるまで、およそは六百十よねん、時うつりことされとも、代くのけんわうちしん、いつれかこれをしやうひしたまはさる。いわんや女のみとなりて、何おろそかにおもふへき。

これによっても本資料が元和年間の成立であることが明らかなのだが、注意すべきは、「いわんや女のみとなりて、何おろそかにおもふへき」とある部分である。これは本資料が女性を読者の対象としていることを表していると見るべきであろう。仏教的な世界観から『源氏物語』を意義付けているところから、作者はおそらく出家者であり、経書や史書など漢籍への言及も多いので男性ではないかと思われるが、仏教や漢学の教養ある女性の可能性もあろう。『源氏物語』に興味を持つ女性たちを念頭に、仏教的教誡の視点から物語を論じ、登場人物から物語を理解する手引書として二部構成の本書を作ったものと考えられる。どうやらそれは「交記」なる人物のようだが、今のところ伝未詳である。

稲賀先生によれば、『源氏系図小鑑』には広本と略本があり、略本は広本に省略の手を入れて作られたものだという（前掲書）。本書の系譜部は略本であり、略本は広本よりも大幅に韻律が強くなっているように見えることから、系譜部については、広本『源氏系図小鑑』に手を加えて書き換えたと思われるのが正しいように思われる。蓬左文庫蔵『源氏之作意』は、この書き換えられた略本を独立した一本として書写されたものなのである。

***Genji-kokagami* manuscript (a “genealogy digest” of The Tale of Genji): Reprinted with bibliographic commentary**

Yoshinobu SENO

Key words: *Genji-keizu-kokagami*, The Tale of Genji, printed materials (“guides”) related to The Tale of Genji, *Genji monogatari*, *Genji-sho*, *Genji-no-sakui*

Genji-kokagami (“A Little Mirror of Genji”), a manuscript preserved in my library, has been republished with a bibliographic commentary.

Genji-kokagami comprises of two sections. The first section introduces lore regarding the circumstances surrounding the writing and dissemination of The Tale of Genji (*Genji monogatari*). It also discusses the main themes and significance of The Tale of Genji, primarily from a Buddhist perspective. The second section provides commentary about the characters appearing in The Tale of Genji, distinguished according to family (“genealogical”) ties and relationships. Keiji Inaga, a prominent scholar of Japanese literature, named the second section of *Genji-kokagami* as *Genji-keizu-kokagami*, which emphasizes the manuscript’s “genealogical” nature as it throws light on the relationships among the characters in The Tale of Genji. From this perspective, reflections are added to the printed materials or “guides” related to The Tale of Genji, which were published during Japan’s Middle Ages. The library of Waseda University contains *Genji-sho* (“Notes on The Tale of Genji”), a text that also comprises of two sections like *Genji-kokagami*, but the order of the sections is reversed in *Genji-sho*. The general commentary section of *Genji-kokagami* is similar to that of *Genji-no-sakui* (“The Central Themes of Genji”) housed in Hosa Library (*Hosa bunko*), Nagoya. Both sections of *Genji-no-sakui* are written in the 7-5 syllabic rhythm style. While the contents of *Genji-no-sakui* and *Genji-kokagami* are different, it is highly probable that these two texts were written by the same author as these works were written at the same premises and for the same purpose.